

パトゥル・リンポチェの般若学の師について

石川 美恵

0. はじめに

リマー (Ris med: 超宗派運動) の実践家であり遊行の成就者であったパトゥル・リンポチェ (dPal sprul rin po che, 以下「パトゥル¹」と略称), 即ちオギエン・ジクメ・チューキワンポ (O rgyan 'jigs med chos kyi dbang po, 1808-1887) は, ゾクチェンの加行をわかりやすく解説した『クンサン・ラマの教え (*Kun bzang bla ma'i zhal lung*)』の著者として知られているが, 彼は顕教の学者でもあり『現観莊嚴論』のハリバドラによる『小註』(MNg) に対して三部 (大 (PP)・中 (PB)・小 (PGR)) の複註も著している².

筆者はこれ迄, MNg に対するパトゥルの三部の註釈書を調べ, パトゥルがゲルク派の宗祖ツォンカパ (Tsong kha pa, 1357-1419) の『善説金鬘 (*Legs bshad gser phreng*)』の科文を大いに参照していること³, さらに PGR の奥書では「ツォンカパの解説に従って」『現観莊嚴論』の真意を註釈している旨を述べていることを明らかにした⁴.

これは, 他宗派からも広く学ぶリマーの実践家・パトゥルならではのと言えるが, ではそもそもパトゥルは般若学を一体誰から学んだのだろうか?

本稿では「パトゥル・リンポチェは誰から般若学を学び, ツォンカパの著作にまで通暁するようになったのか?」について考察していく。

これを明らかにすることは, 他派におけるツォンカパの位置付けを知ることになるだけでなく, 19世紀のニンマ派における般若学の相承を明らかにし, リマー運動の一端をも詳らかにするものと考えられる。

1 パトゥルとは, 初代 dPal dge bsam gtan phun tshogs (d. 1807?) の sprul sku の略称であり, 「パトゥル」と呼ばれることもあるが, dPal の発音は地方差もあるため, 本稿では日本で比較的良好に知られている「パトゥル」に統一する。尚, パトゥルの略伝については, 石川 2021, 219-220, n.1 を参照されたい。

2 この三部の註釈書は現在でも, ニンマ派の僧侶が般若学を学ぶ際のテキストとなっている。Cf. 石川 2017, 218, n.1.

3 Cf. 石川 2016.

4 PGR 226.7-8 (石川 2017, 218, 8-10): 「『現観莊嚴論』の真意を註釈するには, 地上には匹敵するものがなく, 閻浮提に太陽と月のように知られているアーリヤ・ヴィムクティセーナの真意をツォンカパ尊者が解説したのに従って, 短い概論をこのように書いた」

1. パトゥルの聴聞と師匠達

チベットでは教えの相承系譜を大切にし、「聴聞録 (gSan yig)」というジャンルがあるほどである。「聴聞」とは、師匠から口伝えで経・論の読み方と解釈を学ぶことであり、高僧の伝記には必ず「この師匠からこの教えを学んだ」という一連の聴聞の記録が列挙される。パトゥルの伝記も密教やゾクチェンなどを中心に、聴聞の様子や教えを受けた師匠の名前が詳細に記されている。

聴聞の履歴を知るため、本稿ではパトゥルの伝記として NT⁵ と Ricard 2017 を用いた。

NT は、パトゥルと弟子のジュ・ミパン ('Ju mi pham 'Jam dbyangs nam rgyal rgya mtsho, 1846-1912) 双方の弟子でもあったケンポ・クンベル (mKhan po kun dpal, 1862-1943) によって編纂されたものであり、Ricard 2017 は Ricard が接した高僧達から聞き取った口伝や、パトゥルの他の弟子達・孫弟子達によって書かれた伝記等も広く参照して再編集した伝記である。ただ、どちらもエピソードごとに列挙されており、必ずしも時系列に沿って経歴が辿れるものではないため、エピソードを突き合わせながらパトゥルの学びの過程を以下に再編してみたい。

パトゥルは生まれるとほどなく、ロンチェン・ニンティクに通暁したドラ・ジクメケルサン (rDo bla 'jigs med skal bzang, b.1789) と彼の師匠であるド・ドゥブチェン 1 世 (rDo grub chen 1 'Jigs med 'phrin las 'od zer, 1745-1821) からバルゲー・サムテンンプツォク⁶ のトゥルク (転生者) と認定された。

バルゲー・トゥルク即位式で、ロンチェン・ニンティクの成就者であるジクメ・ギェルウエーニユグ ('Jigs med rgyal ba'i myu gu, 1765-1842)⁷ に会う。彼は幼いパトゥルの

5 NT の編著者であるケンポ・クンベルは、別名トッペン・クンサンチューダク (Thub bstan Kun bzang chos grags) またはクンサンベルデン (Kun bzang dpal ldan) ともいい、パトゥルの親戚 (血族という説もあるが、パトゥルの姉妹の夫がクンベルの父の兄弟だったとも言われている。Cf. Ricard 2017, 245, n.239) であり、幼い頃からパトゥルに付き従っていた弟子である。ゾクチェン僧院のシュリーシンハ仏教大学でも学んだ学僧で、後にド・ドゥブチェン 4 世 (rDo grub chen 4 'Jigs med phrin las dpal 'bar, 1927-2022) の師となる。パトゥルやジュ・ミパンの傍らで『入菩提行論』の講義を聞き続けた弟子であり、彼の解説書は『クンベルの入菩提行論 (Kun dpal sPyod 'jug)』としてチベットでは名高い。

6 初代バルゲーは、文殊菩薩を守護尊 (yid dam) とし『マンジュシュリー・ナーマサンギーティ (Mañjuśrī-nāmasaṃgīti: Mañjuśrījñānasattvasya paramārthā nāmasaṃgīti)』を十万回唱えた修行者で、マモ・タン (Ma mo の平原) と呼ばれる吉祥な地に、女性遊行者デト・ボンモ (sDe stod dpon mo) の予言に従い、聖なるマニ壁を建立した人物である。この壁を見たすべての衆生に利益をもたらすように、「om maṇi padma hūm」の観音のマントラや、聖なる詩句や絵が手で彫られた十万個以上の平らな石でできていた (Cf. Ricard 2017, 2; NT, 13)。

7 ジクメ・ギェルウエーニユグは、ロンチェンパ (ロンチェン・ラプジャムパ: Klong chen rab 'byams pa dri med 'od zer, 1308-1364) が再興したゾクチェンの教えを、彼のヴィジョンによって明らかにし再編したジクメリンパ (Kun mkhyen 'Jigs med gling pa, 1729~1730-1798) の「御心の弟子」であり、ド・ドゥブチェン 1 世の直弟子でもあった。洞窟に籠ることさえせず、岩陰や浅い窪みなどで暮らし、野生の草や根を食す苦行者であったという (Cf. Ricard 2017, 6)。別名をペマ・クンサン (Pad ma kun bzang) といい、『クンサン・ラマの教え』は、師が説くジクメリンパのロンチェン・ニンティクの講話に感銘を受けたパトゥルが、師の教えに基づいてまとめたロンチェン・ニンティクの前行の詳細な解説書である。

もとに頻繁に通い、教えを受けた根本ラマである。

パトゥルは、若い頃から師のギェルウェーニュグや、師の師であるド・ドゥプチェン1世に随行して旅をし、師匠方のお世話係や法要の手伝いなどをした。

このような中で、根本ラマであるギャルウェーニュグからは、ジクメリンパの系統のロンチェン・ニンティクの前行についての教えを受けたが、パトゥルはそれを少なくとも25回は聴聞したという。この他ロンチェン・ニンティクが伝える体内を流れる微細な風 (rlung) と脈管 (rtsa) の修行を含むヨーガも教わり、ゾクチェンの本質的な修行について口頭伝授や講説も受けている⁸。

時期ははっきりしないが、ド・ドゥプチェン1世からはマハーヨーガに属する『グフヤガルバ・タントラ (*Guhyagarbha-tantra*)』の教えも授かり、後年、パトゥルは毎年開かれる45日間の説法会と修行会を指導するようになる (Ricard 2017, 58)。

20歳頃から、東チベット・カム地方のゾクチェン僧院 (rDzogs chen dgon) の周辺で暮らし、学匠シェーラプサンポ (mKhas pa Shes rab bzang po, b.18th c.) から沙弥戒を受けた⁹。

ゾクチェン僧院では、第7代僧院長のゾクチェン・リンポチェ4世・ミンギュルナムカイドルジェ (Mi 'gyur Nam mkha'i rdo rje, 1793-1870) や、第8代僧院長およびシュリーシンハ仏教大学の第2代学長となるギェルセー・シェンペンタイェー (rGyal sras gzhan phan mtha' yas, 1800-1855) からロンチェン・ニンティクの他、ロンチェンパの『三安息 (Ngal gso skor gsum)』、ニンマ派に口頭で伝わる教説 (rNying ma bka' ma) の伝授など広範囲の教えを受けている。

また、ジクメリンパの弟子で、かつゾクチェン・リンポチェ4世の師匠でもあるジクメゴムツァル (Jigs med ngo mtshar, b.1730~1750)、彼の弟子のドラ・ジクメケルサンから、ロンチェンパの著作の他、シャーンティデーヴァの『入菩提行論 (*sPyod 'jug*)』、根本タントラである『秘密心髓 (*gSang ba'i snying po*)』等の顕密の多くの教えや文法等を学んだ。

この時期に、パトゥルは学問を完成させるため、ニンマ派六大寺の一つであるシェチェ

因みに、パトゥル・リンポチェはジクメリンパの「御言葉の化身 (sprul pa)」とされている (Cf. NT 13; Ricard 2017, 226, n.32)

8 Cf. Ricard 2017, 8; NT, 19.

9 彼が沙弥戒を受けた理由について、伝記は次のように伝えている：パトゥルには初代バルゲーラマの甥が管理し経理を担当している屋敷があったが、パトゥルが20歳頃にその甥が亡くなったため、パトゥルは屋敷など物理的な資産をすべて捨て、師匠のギェルウェーニュグ同様に質実な行者の道を選んだ。師匠は一箇所にとどまり修行し続ける誓いを立てたが、パトゥルは幼少期に育った地の遊牧民同様に永住地を持たず、遊行の修行者となった。

パトゥルに関してはある予言がなされていた。それは、「埋蔵教説 (gter ma) の発掘者 (gter ston) となり妻帯のヨーガ行者として暮らさねばならない」というものだった。しかしパトゥルには妻帯する気がなく、修行僧の誓いを守っていた。ただ、予言の吉兆の縁を妨げ寿命を縮めたりしないように、具足戒を受けた出家僧ではなく見習い僧の沙弥戒を受け、更にヨーガ行者になるという予言に反しないように、僧ではなく在家者の格好をしたのであった。(Cf. Ricard 2017, 9-10)

ン僧院 (Zhe chen bstan gnyis dar rgyas gling) にも赴いた。ここでは、シェチェン・ウオントウル (Zhe chen dBon sprul 'gyur med mthu stobs nam rgyal, b.1787) より十三大論書¹⁰を中心にチベット大蔵經にあるすべての經・論、サンスクリット文法、ロンチェンパとその弟子達およびジクメリンパの著作のみならず、サパン・クンガーゲルツェン (Sa skya paṅḍi ta Kun dga' rgyal mtshan, 1182-1251) や、ツォンカパ等、古派と新派の高僧達が著したあらゆる論書を等しく学んでいる。

学んだことを実践するため、ゾクチェン僧院上方にあるルダムヤンウエン (Ru dam yang dben) にあるヤマンタカ洞窟 (gShin rje sgrub phug) と長寿窟 (Tshe ring phug) 等に長い間住み修行を続けたが、この修行窟時代に『クンサン・ラマの教え』を編集している。

長寿窟で暮らしていた頃、ド・ドゥブチェン1世の弟子で、ジクメリンパの転生者として知られる風狂の成就者ド・ケンツェー (mDo mkhyen brtse Ye shes rdo rje, 1800-1866) に、「直接の導き入れ」を受け、広大な大空のように曇りなく明瞭な心の状態に達したという¹¹。

パトゥルは30歳頃から人々に教え始めるが、学び続けることもやめなかった。

ザムタン ('Dzam thang) に行き、ツァンパ・ガワンチュージョル (gTsang pa dge slong Ngag dbang chos 'byor, b.18-19th c.) から六支加行 (sbyor drug) を学んだ¹²。

ミニャク (Mi nyag) 地方を訪れ、ダ・ゲシェー・ツルティムナムギェル ('Dra dge bshes Tshul khriṃs nam rgyal, b.18-19th c.) に般若 (phar phyin) について多くの質問をし答えを得て、様々な観点から論じ合ったところ、ダ・ゲシェーはパトゥルの学識の高さを讃えたという¹³。

パトゥルは人に請われ教えを続けるが、ド・ドゥブチェン1世の遷化 (1821) ののち数年後に、ド・ドゥブチェン2世を連れてアムドのニエンポ・ユツェ (gNyan po g-yur tse) 山脈の近くにあった湖のそばにあるド・ケンツェーの野營地を訪れた際、ド・ケンツェーからユムカンドー・デチェンギェルモ (Yum bka' 'gro bde chen rgyal mo)

10 gzhung chen bcu gsum は Āryadeva, Asaṅga, Candrakīrti, Nāgārjuna, Śāntideva, Vasubandhu の律, 阿毘達磨, 菩薩道, 般若や中観に関する十三の著作を言う。(Cf. Ricard 2017, 225, n.29)

11 ド・ケンツェーによる「導き入れ」の件は, Ricard 2017, 12-13 に詳しい。Cf. 石川 2021, 215, 2.3.2 老犬アブ。

12 Cf. NT, 28, 9-11. また, Ricard 2017, 56 にはザムタンがチョナン派やカーラチャクラ・タントラの学びの中心地であったことが記されており, ここでパトゥルはガワンチュージョルからカーラチャクラの伝授を受けている。

ガワンチュージョルはド・ドゥブチェン1世の弟子で (Cf. BDRC, ngag dbang chos 'byor; Teacher. 尚, 本稿では, BDRC を参照する際は, 同サイトの記載通りに表記する), 出家戒を厳格に守る清僧として名高かったという (Ricard 2017, 56)。パトゥルはこの人物からカーラチャクラ・タントラの伝授を受け, 六支加行を学んでいることになる。

13 ダ・ゲシェーは, 'Dra pa dge bshes Tshul khriṃs nam rgyal または 'Dra ba dge bshes Tshul khriṃs nam rgyal とも言う。この件は伝記では次のように記されている: パトゥルが去った後, ダ・ゲシェーは従者に「私も經典に関しては少しばかり学んでいるが, 顕密の両方に関してバルゲーに勝る者はいない。彼は別格だ」と言った。(NT, 28, 10-18; Ricard 2017, 27)

という特別な教えの灌頂・伝授・講説を与えられている¹⁴。

また、「トム (Khrom) の大成就者」として知られるチューインランドル (mTsho phu grub chen 'gyur med Chos dbyings rang grol, b. 18th c.) に教えを乞うため、東トムタルに向かっている。チューインランドルはカトク・ニンマ (Ka thog rNying ma) の伝統に則ったカトク僧院で学び、その後の全生涯を修行に捧げた修行者だった。テルトン・ロンセルニンポ (gTer stong Klong gsal snying po, 1625-1692) のカトク系統の教えを専ら行じており、パトゥルが求め、チューインランドルから学んだのもその教えだった。

チューインランドルは、後に修行の結果として「大いなる悟り (chos nyid zas sa)」と呼ばれるゾクチェンの最高の境地を得たという¹⁵。

以上が、伝記から窺えるパトゥルの主な聴聞・伝授の履歴である。

パトゥルの著作は小品が多く、大部のものは先述した『クンサン・ラマの教え』とハリバドラの『小註』に対する三部の注釈書 (PP, PB, PGR; 殊に PP が大部) のみである。前者は根本ラマのゲルウェーニユグの講義録をもとにした編著作で、伝記にも聴聞と編集がはっきりと記されている。そうであれば、後者に関しても同様な記述があっても良いはずである。しかし、三部の注釈書の著述時期は伝記には書かれていない (Cf. 石川 2021)。では、聴聞はどうだろうか。

前述の聴聞履歴を見る限り、般若学とパトゥルを結びつける師匠は、十三大論書など大蔵経の経論をすべて授けてくれたシェチェン僧院のシェチェン・ウォントウル (以下、ウォントウルと略称) と、ミニャクのダ・ゲシェーの二人に絞られる。

ここでの問題は、パトゥルが三部の注釈書を明確に「ツォンカパ尊者が解説したのに従って」書いたと記していることであり、そうであればツォンカパの教えを正しく伝える師匠から教えを受けていたことになる。では、前述の二人はツォンカパの教えの相承に連なる師匠達であったのだろうか？

それを明らかにするために、この二人について探してみる。

2. シェチェン僧院と『小註』の相承系譜

2-1 シェチェン・ウォントウル

ウォントウルは、ゾクチェン・リンポチェ 4 世やゲルセー・シェンペンタイエーの弟子であり、チベット古代王国時代の大臣トゥミ・サンポータ (Thu mi sam bho ta, 7th c.) や翻訳師ヴァイローチャナの弟子ユダニンポ (g-Yu sgra snying po, 8-9th c.) 等の転生者と

14 Ricard 2017, 68-69, cf. 232 n.86. Yum bka' mkha' 'gro bde chen rgyal mo ka.

15 Ricard 2017, 96-97.

されている (Cf. Ricard 2017, 222).

多くの高僧達を育てたが、中でも19世紀のチベット超宗派運動の立役者とも言えるジャムヤンケンツェーワンポ ('Jam dbyangs mkhyen brtse'i dbang po, 1820-1892. 以下、ジャムヤンケンツェーと略称) とジャムグンコントウル・ロドゥータイエー ('Jam mgon kong sprul Blo gros mtha' yas, 1813-1899. 以下、コントウルと略称)、そしてパトゥルが著名であろう。この三人の弟子達は歳の差こそあれ、同時期に肩を並べてウォントウルのもとで学んだ学友であり、パトゥルの伝記には僧院における師匠ウォントウルと三人の弟子達のエピソードも描かれている (Cf. Ricard 2017, 11-12).

ウォントウルの師匠は先述したゾクチェン・リンポチェ4世など、殆どがニンマ派であるが、ツェーイゲゲン・ギェルメキェムチョク (rTse'i dge rgan 'gyur med skyes mchog, b.18th c. 以下、ツェーイゲゲンと略称)、別名: ケーワン・ガラップキェムチョク (mKhas dbang sngags rab skyes mchog) はゲルク派であった。

ツェーイゲゲンは文語文法や修辞学、および論理学を得意とし、これらをウォントウルに伝えた¹⁶が、コントウルの『聴聞録』(KSY)によると、コントウルはウォントウルから、ウォントウルはツェーイゲゲンから『明瞭義釈 (*mNgon rtogs rgyan gyi 'Grel pa don gsal; Abhisamayālamkāra - nāma - prajñāpāramitopadeśasāstra - vivṛti*)』、つまり、ハリバドラの『小註』を聴聞している¹⁷。

チベットにおいて般若学は、この『小註』解釈であるから、これこそがニンマ派六大寺の一つであるシェチェン僧院における般若学の相承系譜と言えよう。

2-2 『小註』の相承系譜

先述したように、ツェーイゲゲン—ウォントウル—コントウルの『小註』の相承系譜は、KSYから明らかである。パトゥルがウォントウルのもとで、コントウルの学友として大蔵経を学んだのであれば、KSYに記された『小註』の相承はパトゥルに至る相承でもある。

そこで、KSYより、『小註』の相承系譜を和訳し掲載する。原文は殆どが師資相承の名称の羅列のため、()内に原文に記されている名称を示した。但し、「:」以下に通名などの関連事項を添え、判明している生没年も記した。生没年不詳のものは「?」もしくは「---」であらわし、便宜的に名前の前に番号を付した。

ハリバドラ (Slob dpon Seng ge bzang po) がお書きになった『明瞭義釈 (*mNgon*

16 BDRC, rtse'i dge rgan; Extended Properties.

17 BDRC, rtse'i dge rgan; Lineages. Cf. KSY, 131, 11: ウォントウルの名前直前にケーワン・ガラップキェムチョクの名前が記されている。尚、『小註』のサンスクリット・タイトルについては、根本 2012, 87, n. 4を参照されたい。

『*rtogs rgyan gyi 'Grel pa don gsal*』の相承は〔次の通り〕

- 1 釈尊 (Thub pa'i dbang po)
- 2 弥勒 (Byams pa)
- 3 無着 (Thogs med, 4~5th c.)
- 4 世親 (dByig gnyen, 4~5th c.)
- 5 聖解脱軍 (Grol sde : 別名 'Phags pa rnam grol sde; Ārya Vimuktisena)¹⁸
- 6 賢解脱軍 (bTsun pa grol sde : 別名 bTsun pa rnam grol sde; Bhadanta Vimuktisena, ---)
- 7 チョクデー (mChog sde : 別名 mKhas mchog mchog gi sde, ---)
- 8 ドウルデー (Dul sde : 別名 mKhas mchog 'dul ba'i sde, ---)
- 9 ナムナンゼー (rNam snang mdzad : 別名 mKhan po rNam snang mdzad bzang po; Vairocana bhadra ?, ---)
- 10 ハリバドラ (Slob dpon Seng ge bzang po; Haribhadra, 8th c.)
- 11 ジュニャーナパーダ (Sangs rgyas ye shes : 別名 Slob dpon Sangs rgyas ye shes zhabs; Buddhajñānapāda, 9th c.)
- 12 グナミトラ (Yon tan bshes gnyen : 別名 Slob dpon Yon tan bshes gnyen, 9~10th c.?)
- 13 リンチェンサンポ (Lo chen Rin bzang : 別名 Lo chen Rin chen bzang po, 958~959-1055)
- 14 ダワサンポ (Zla ba bzang po : 別名 Shar phyogs pa Zla ba bzang po, ---)
- 15 プンタクスムバ (Pañ chen 'Bum phrag gsum pa [sic])¹⁹
- 16 ゴク・ロデンシェラブ (Lo tsa' Blo ldan shes rab : 別名 rNgog Blo ldan shes rab, 1059-1109)
- 17 デーシェラブ ('Bre shes rab : 別名 'Bre shes rab 'bar, b. 11th c.)
- 18 アル・チャンチュプイエシエ (Ar byang chub ye shes : 別名 byang chub ye shes, b. 11th c.)
- 19 ドウルジンカルモ ('Dul 'dzin dkar mo, 11th c.)
- 20 カーチュンリンチェン (Ka' chung rin chen : 別名 dKar chung ring mo, ---)
- 21 シャンイエパ・ジャムペルドルジェ (Zhang ye pa 'Jam dpal rdo rje, ---)

18 コントゥルの『聴聞録』だけでなく、チベットの仏教史書でも聖解脱軍は世親の弟子とされるが、近年の研究では7~8世紀の人物とする説が有力である (Cf. 田中 2014, 48)。

19 プンタクスムバ (Pañ chen 'Bum phrag gsum pa byams pa chos grags, 1432~1433-1504) は年代的に合わない。ゴク・ロデンシェラブの師であれば Pañ chen 'Bum phrag gnyen pa, 別名 Dhirapāla または bsTan skyong 'Bum phrag gsum pa であろう。テンキョン・プンタクスムバはスティラパーラ (Sthirapāla; bsTan skyong) と呼ばれ、ゴク・ロデンシェラブにチベットに招かれ共訳作業に従事した。ゴクの般若経の師匠である (加納・中村 2009, 125, n.31)。

- 22 タルマツルティム (Dar ma tshul khirms : 別名 gZad ring Dar ma tshul khirms, ---)
- 23 ツォンドゥードルジェ (brTson 'grus rdo rje : 別名 Bo dong brTson 'grus rdo rje, b. 12-13th c.)
- 24 タクデーワ (sTag sde ba : 別名 sTag sde ba Seng ge rgyal mtshan, 1212-1294)
- 25 パンロチェンポ (dPang lo chen po : 別名 dPang lo tsa' ba Blo gros brtan pa, 1276-1342)
- 26 ラマタンパ (Bla ma dam pa : 別名 Sa skya bla ma dam pa bsod nams rgyal mtshan, 1312-1375)
- 27 レンダーワ (Red mda' ba : 別名 Red mda' ba gZhon nu blo gros, 1348~1349-1412)
- 28 ツォンカパ (Tsong kha pa : 別名 Tsong kha pa Blo bzang grags pa, 1357-1419)
- 29 タルマリンチェン (Dar ma rin chen : 別名 rGyal tshab Dar ma rin chen, 1364-1431~1432)
- 30 ゲレクベルサンポ (dGe legs dpal bzang : 別名 mKhas grub rje dGe legs dpal bzang, 1385~1386-1438)
- 31 シャルパ・リンチェンギェルツェン (Shar pa Rin chen rgyal mtshan, b.14th c.)
- 32 ケンチェン・ガワンベル (mKhan chen Ngag dbang dpal : 別名 Ngag dbang dpal pa, ---)
- 33 ジェ・ゲンドゥンルンドゥブ (rJe dGe 'dun lhun grub : 別名 sNgags pa dpon slobまたはsNgags chen dGe 'dun don grub, b.17th c.)
- 34 エーパ・ロサントウンドゥブ (E pa Blo bzang don grub : 別名 Hor dka' chen Blo bzang don grub?, b. 17th c.?)
- 35 ロサンイエシェ (Blo bzang ye shes, 1663-1737)
- 36 ジェ・タムチューページョル (rJe Dam chos dpal 'byor : 別名 sNgags chen Dam chos dpal 'byor, b.18th c.)
- 37 ロサンタイエー (Blo bzang mtha' yas : 別名 rJe drung Blo bzang mtha' yas, b.17th c.)
- 38 イエシェタイエー (Ye shes mtha' yas : 別名 mNga' ris dka' chen Ye shes mtha' yas または Zhang chung pa Ye shes mtha' yas, b.18th c.)
- 39 ロンドルラマ (Klong rdol rin po che : 別名 Klong rdol bla ma Ngag dbang blo bzang, 1719-1794)
- 40 ロサンチューページョル (sNgags rams Blo bzang chos 'byor, ---)
- 41 ガワンチューベル (Ngag dbang chos 'phel, ---)
- 42 ダライラマ五世 (Blo bzang rgya mtsho : 別名 Ta' la'i bla ma 5 ngag dbang blo

bzang rgya mtsho, 1617-1682)

43 ツェーイゲゲン (sNgags rams 'Gyur med skyes mchog : 別名 rTse'i dge ryan 'Gyur med skyes mchog, b.18th c.)

44 ウォントウル (Kun gzigs mthu stobs rnam rgyal : 別名 Zhe chen dBon sprul 'gyur med mthu stobs rnam rgyal, b.1787)

彼 (Kun gzigs mthu stobs rnam rgyal, つまりウォントウル) が, 私 Karma ngag dbang yon tan rgya mtsho (コントロールの別名) に授けてくださったのだ. (KSY, 131, 2-12)

上述の人物の生没年を見ると, 年代的に合致しないものもある.

1~6の 釈尊, 弥勒を経て聖解脱軍 (アーリヤ・ヴィムクティセーナ), 賢解脱軍 (バダ Tantra・ヴィムクティセーナ) に至る相承に関しては, チベットで受容されている般若の一般的な相承系譜と考えられる. ナルタン寺の写本大蔵経の建立に貢献したチョンデンリクレル (bCom ldan rig ral, 1227-1305) の『弥勒法の歴史 (Byams pa dang 'brel ba'i chos kyi byung tshul)』でも, アーリヤ・ヴィムクティセーナは世親の四大弟子の一人と看做されており, アーリヤ・ヴィムクティセーナの後を受けバダ Tantra・ヴィムクティセーナが『二万五千頌般若』を解説したことが記されている (加納・中村 2009, 123).

バダ Tantra・ヴィムクティセーナに続く 7 チョクデーと 8 ドウルデーについてターラナータは, 俱舎学者の徳慧 (Gūṇamati; Yon tan blo gros, 5th c.) や論師の護法 (Dharmapāla, 530-561) と同時代人の富裕な小国出身者として名を上げており, Varasena (Prasena) と Vinītasena 師弟と推定される (Cf. TC, 154).

また, 9 ナムナンゼーは, ハリバドラの師で律師のヴァイローチャナバドラ (Vairocana bhadra) と思われる. 10 ハリバドラはヴァイローチャナバドラから『般若経』と『現分別優婆提舍 (Abhisamayālaṅkāropadeśa : mNgon par rtogs pa)』の講義を聴いたのである²⁰.

11 ジュニャーナパーダは, 後期密教経典『秘密集会タントラ』の注釈・修行法「ジュニャーナパーダ流」の祖だが, ハリバドラの弟子 (デーヴァブッダジュニャーナの別名) と言われている (加納・中村 2009, 125 ; TC, 210).

20 ターラナータの仏教史には次のように書かれている: [ハリバドラは] ヴァイローチャナバドラから『般若経』と『現観莊嚴論』の講義を受け秘訣を聞いたのち, 東方カサルパナ (khasarpana) の森で弥勒 (rGyal ba Mi pham pa, Cf. 辛嶋 2019) を成就 (*「直接コンタクトを取った」と権田ガワンウースン先生は表現) したので, 夢の中に弥勒がお顔を現して「いま般若の意味について異なった学説の論書が多いので, 誰に従ったら良いでしょうか」[と, ハリバドラが弥勒に尋ねたところ]「妥当な箇所を〔抽出して集めて〕まとめなさい」と許可をお与えくださった. ほどなくダルマパーラ王がハリバドラを招聘して, ティカとトゥカとツァワの三つの僧院 (トゥリカトゥカ湖の隠所? cf. 加納・中村 2009, 124) に住して, [そこで] 何千人という多くの人々に『般若経』の教えを説いたり, 『八千頌般若経』の大注釈等の多くの論書をお作りになった (TC, 209-210).

ジュニャーナパーダの弟子の12 グナミトラ²¹ から、後伝期にハリバドラの『現観莊嚴論 大註』(*Abhisamayālamkāraloka-prajñāpāramitā-vyākhyā*, 以下『大註』と略称)を改訂・翻訳した訳経僧である13 リンチェンサンポに教えが継がれる。漸く般若学の法流がチベットに齎されたのである。

次の14 ダワサンポ(未詳)をへて、インドから招かれた15 ブンタクスムバ、彼の弟子である16 ゴク・ロデンシェラブへと続く。ゴクは『小註』の改訂・翻訳者であり、彼によりチベット般若学の基礎が整えられた。

ゴクの弟子である17 デーシェラブはゴクの般若経の教えを詳解し、後伝期の般若学の流れを作った(MD, 1239-1240)。彼の解釈は、カム地方に伝えられていた前伝期の解釈方法から出たものであった(兵藤 2000, 19)。彼は多くの弟子を育てたが、その頂に立つのが、チベット般若学の最初期の『小註』複註を著した18 アル・チャンチュプイエシエである。アルの弟子で最も高名な20 カーチュンリンチェン(MD, 1919には sKar chung ring mo gZhon nu thsul khirms となっている)も『小註』複註を書いている。19 ドウルジンカルモもアルの弟子で、カーチュンリンチェンと21 シャンイエバ・ジャムペルドルジェ²²の師でもある(cf. BDRC, dul 'dzin dkar mo)。

この後、22 タルマツルティム(未詳)に受け継がれるが、24 タクデーワの師匠のポドンといえばポドン・リンチェンツェモ(Bo dong Rin chen rtse mo, 12th c.)であるから、23 ツォンドウドルジェはこの人のことであろうか。ポドン・リンチェンツェモは、チョナン派のカーラチャクラ・タントラの伝承者セモチェワ(Se mo che ba Nam mkha' rgyal mtshan, 12th c.?)の弟子で、カーラチャクラ・タントラの法嗣として著名となり多くの弟子を育てた(MD, 1092)。その筆頭がタクデーワである。彼は、カーラチャクラ・タントラに秀でたが、般若経や論理学などもリンチェンツェモから学んでいる(MD, 737)。

タクデーワの弟子の25 バンロチェンポもカーラチャクラ・タントラの学匠であるが、他にも密教や論理学など(大蔵経の経論)をタクデーワから教わっている(MD, 993)。バンロチェンポの弟子もまた多いが、その中の一人が26 ラマタンパ(別名 Chos rje bSod

21 ターラナータの仏教史には、ジュニャーナパーダの弟子として、ラブシシェニエン(Rab zhi bshes gnyen; Praśāntimitra)なる人物が記載されている。彼は、俱舎と般若とクリヤーヨーガの3部に精通しており、徳高く人々を利し、夜叉にすら援助されていたほどだったという(Cf. TC, 212)。このブラシャエンティミトラがグナミトラのことであろうか。或いは何か混同があるのだろうか。

チョンデンリクレルは、ジュニャーナパーダが『宝徳蔵般若経註』(*Saṅcayagāthāpāñjikā*)を著した際の経緯として、ナーレンドラの比丘尼グナミトラ(nā len dra'i dge slong ma yon tan bshes gnyen, 加納・中村 2009, 133)に請われて同書を書いた旨を記しており、『文殊口伝』(*Mukhāgamavṛtti*)の同様の記述も引用している。しかし、チョンデンリクレルは(注釈書を書くよう請うただけであるから)グナミトラを相承系譜に加えるのは誤りだ、と付け加えてもいる(Cf. 加納・中村 2009, 125-126)。

22 デーシェラブとアル・チャンチュプイエシエ双方の弟子のク・セルツォン(Khu ser brtson, 1011-1075)はコントゥルの『聴聞録』に名前がないが、このク・セルツォンとカーチュンリンチェン双方の弟子に、シャンイエワ・モンラムツルティム(Zhang g-ye ba sMon lam tshul khirms, ---)がいる。彼も『小註』の大部の注釈書を著しているため、シャンイエバ・ジャムペルドルジェというのは、このモンラムツルティムのことであろうか。この法系はプトン・リンチェンドゥブに繋がっていく(Cf. 兵藤 2000, 20)。

nams rgyal mtshan, MD, 994) であり、『小註』注釈の大・小二本を著している。彼はプトン・リンチェンドゥブ (Bu ston Rin chen grub, 1290-1364) の弟子でもあり、また 28 ツォンカパの師の一人とされている (MD, 1154)。

27 レンダーワはラマタンパから般若学を学んでおり、その教えを受けたのが 28 ツォンカパである。ツォンカパは当初、チョナン及びサキヤ派の般若学の泰斗ニャオン・クンガーベル (Nya dbon Kun dga' dpal ba, 1285-1379) から般若とそれを理解するための『俱舍論』を学ぼうとしたが、ニャオンは体調等を理由に弟子のレンダーワをツォンカパに紹介した (石浜・福田 2008, 45)。

『デプテルゲンポ (*Deb ther sngon po*)』によると、レンダーワはニャオンについて般若学を完全に学んだ後に、弟子達の願いによって『小註』注釈書を作ったとされる (兵藤 2000, 22) が、別の説ではレンダーワが般若を学んだのはラマタンパであり、ニャオンから学んだのは『量評釈 (*Tshad ma rnam 'grel*)』であったとしている (MD, 1619)。

ツォンカパの『小註』注釈書の『善説金鬘』は、『デプテルゲンポ』によると、レンダーワから『小註』を学び、後に遊行に出る前に書き上げたものだが、すぐに遊行に出たので彼の解釈の伝統を受けたものはあまりいないという (兵藤 2000, 22)。そのため、現在に至るまでゲルク派で般若学のテキストとして学ばれているのは、ツォンカパの弟子の 29 タルマリンチェンの『小註』注釈書、『心髄莊嚴 (*rNam bshad snying po rgyan*)』である。

ツォンカパの高弟で、レンダーワから弥勒の五法を学び、タルマリンチェンにも多くの教えを受けた 30 ゲレクベルサンボから、31 シャルパ・リンチェンギャルツェンへと続くが、彼はサキヤ派の翻訳僧である²³。これは、レンダーワ-ツォンカパの (サキヤ派系の) 法流の般若学が受け継がれた、ということであろうか。

次の 32 ケンチェン・ガワンベルは、ゲルク派のデプン僧院ゴマン学堂の第 7 代学堂長 ('Bras spungs sGo mang grwa tshang gi mkhan thog 7)²⁴ であるが、次の 33 ジェ・ゲンドウンルンドゥブとの師弟関係が、他文献では未だ辿れていない。ジェ・ゲンドウンルンドゥブはパンチェンラマ 4 世 (Pañ chen 4 Blo bzang chos kyi rgyal mtshan, 1570-1662)²⁵ の弟子で、チャンキヤ 2 世 (lCang skya 2 Ngag dbang blo bzang chos ldan, 1642-1714)²⁶ の師でもある。

ところで、パンチェンラマ 4 世というのは、ダライラマ 5 世の師匠でタシルンポ僧院長であったロサンチューキギェルツェンのことであるが、彼をタシルンポのパンチェンラマ

23 MD, 1607.

24 Cf. BDRC, ngag dbang dpal pa; Other Title.

25 Cf. BDRC, paN chen 04 blo bzang chos kyi rgyal mtshan; Students.

26 チャンキヤは青海のゲルク派の名刹グンルン寺の転生僧の系統で、歴代チャンキヤは清朝の宗教顧問とも言える立場で国師の称号を受け厚遇されている。殊にチャンキヤ 2 世はラサに留学し、デプン僧院ゴマン学堂で学び、ダライラマ 5 世を師として具足戒を受けるなど、ダライラマ 5 世との関わりも深い (Cf. 栗本 2008, 49, 51-52)。

(パンチェンラマ4世)と認めて以後パンチェンラマの称号が始まり、その三代に渡る前生にパンチェンラマを追贈したのである。従って、三代前の前生であるゲレクベルサンポがパンチェンラマ1世とされた。この数え方を「タシルンポ流 (bKras shis lhun po lugs)」と言う。(追贈のない場合はロサンチューキギェルツェンを1世として数えるが、本稿ではタシルンポ流に従う)。

34 エーパ・ロサントゥンドゥブはダライラマ5世とタシルンポ流との関わりから推測すると、パンチェンラマ3世ウエンサパ・ロサントゥンドゥブ (dBen sa pa Blo bzang don grub, 1505-1568) のことではないだろうか。恐らく 35 ロサンイエシエ²⁷ はパンチェンラマ5世(追贈のない場合はパンチェンラマ2世)であろう。この辺りは年代が前後しているが、ゲレクベルサンポから続くタシルンポ系の般若経の法流を意図しているものと推測できる。

この推測が正しいと思われるのは、36 ジェ・ダムチューページョルがパンチェンラマ5世の弟子でタシルンポ寺密教学堂第11代学舎長 (bKras lhun rgyud pa grwa tshang khri 11) としても知られるからである²⁸。

37 ロサントゥンタエもパンチェンラマ5世の弟子とされ²⁹、38 イエシエタイエもタシルンポの学匠³⁰であり、39 ロンドルラマ (Klong rdol rin po che: 別名 Klong rdol bla ma Ngag dbang blo bzang, 1719-1794) の師匠と言われる³¹。ロンドルラマはダライラマ7世 (Dalai Lama 7 bsKal bzang rgya mtsho, 1708-1757) やパンチェンラマ6世 (Pan chen 6 dPal ldan ye shes, 1738-1780) などの学者のもとで学んでいる³²。

続く 40 ロサンチュージョルおよび 41 ガワンチューベルの双方とも未詳であるが、その法流が 42 ダライラマ5世に受け継がれ、この教えの相続に 43 ツェイゲゲン - 44 ウォントウルが預かったとしているわけである。

2-3 ダライラマ5世の『伝授の相承録』

ツェイゲゲンの直前の相承の師とされているダライラマ5世にも、教えの相承系譜が残されており、その中に『「現観莊嚴論」の偈および注釈の伝授の相承録』(LG)がある。

KSYでは、ダライラマ5世前後の記録に年代的な齟齬が生じているため、ここでダライラマ5世が伝える相承系譜も確認した³³。

27 Cf. BDRC, paN chen bla ma 02; Teachers and Students.

28 Cf. BDRC, ngags chen dam chos dpal 'byor; Personal Name.

29 Cf. BDRC, rje drung blo bzang mtha' yas; Teachers.

30 Cf. BDRC, mnga' ris dka' chen ye shes mtha' yas; Occupies Seat and Students.

31 Cf. BDRC, mnga' ris dka' chen ye shes mtha' yas; Students.

32 Cf. MD, 80.

33 LG, 33-34.3: 人名の列挙が始まる前の序文を和訳する。

「隠義〔である〕現観の意味を誤りなく明確に示すのは、弥勒 (rGyal tshab Mi pham mgon po) が著された『現観莊嚴論 (bsTan bcos mNgon par rtogs pa'i rgyan)』、その註釈であるハリバドラ (Slob dpon Seng ge bzang po) がお書きになった『明瞭義釈 (Don gsal)』の偈頌 (rtsa) と註釈 ('grel) の両者の複註 (tikā)

ドライラマ5世は、『現観莊嚴論』に対する複数の系統の伝授を受けているが、そのうちの「ゴク流の相承系譜 (rNgog lugs brgyud)」が、KSYの伝えるものに最も近い。

その人名をKSY同様に以下に記す。()内にLGの表記を示した。冒頭の番号は仮に付したもので、生没年はKSY未出の人物にのみ記した。尚、下線部は洋装本(LG)も写本版(LGm)もともに小字で記してあり、注記に当たるものと思われる。

- 1 浄飯王の御子息 (Thub dbang Zas gtsang sras po = 釈尊)
- 2 弥勒 (rJe btsun Byams pa mgon po)
- 3 無着 ('Phags pa Thogs med)
- 4 世親 (Slob dpon dByig gnyen)
- 5 聖解脱軍 ('Phags pa rNam grol sde)
- 6 賢解脱軍 (bTsun pa rNam grol sde)
- 7 チョキデー (mChog gi sde)
- 8 ドウルウェーデー (Dul ba'i sde)
- 9 ケンポ・ナムナンゼー (mKhan po rNam snang mdzad)
- 10 ハリバドラ (Slob dpon Seng ge bzang po)
- 11 ジュニャーナパーダ (Slob dpon Sangs rgyas ye shes zhabs)
- 12 グナミトラ (Slob dpon Yon tan bshes gnyen)
- 13 リンチェンサンポ (Lo chen Rin cen[sic] bzang po)
- 14 ダワサンポ (Shar phyogs pa Zla ba bzang po)
- 15 ロッポン・テンキョン (Slob dpon bsTan skyong)
'Bum phrag gsum pa'ang zer / (ブンタクスンパとも言う.)
- 16 ゴク・ロデンシェラブ (Lo tsa ba Blo ldan shes rab)
- 17 デーシェーラブ ('Bre shes rab 'bar)
- 18 アル・チャンチュプイエシエ (Ar byang chub ye shes)
- 19 ドウルジンカルモ ('Dul ba 'dzin pa dkar mo)
- 20 カーチュンリンチェン (dKar chung ring mo)
- 21 シャンイエパ・ジャムペルドルジェ (Zhang ye ba / gNyal zhig 'jam dpal rdo rje)

[の]、ゲェルツァブ一切智者 (rGyal tshab thams cad mkhyen pa = タルマリンチェン) がお書きになった『心髄莊嚴 (rNam bshad snying po rgyan)』、パンチェン・ソナムダクバ (Pan chen bSod nams grags pa, 1478-1554) がお書きになった『概論 論理の首飾り (sPyi don thal 'preng)』、ダクニャク・ロドーベル (Dwags nyag blo gros 'phel, b. 15th c.) の『概論 (sPyi don)』、セラジェツン・チューキギェルツェン (Se ra rje btsun Chos kyi rgyal mtshan, 1469-1544-1546) の諸々の『論理の首飾り』に基づいた概論註釈および『論理の首飾り』を善く聞いたゴク流 (rNgog lugs) の相承系譜 (brgyud) は、...」(以下本稿本文のLGの人名が列挙される.)

LGは続いてドム流 ('Brom lugs) やク流 (Khu lugs) など、様々な支流に分岐しながらドライラマ5世に至る相承系譜も綴っているが、KSYと重ならないため本稿では割愛する。

- 22 タルマツルティム (gZang ring Dar ma tshul khirms)
- 23 ツォンドゥードルジェ (Bo dong pa brTson 'grus rdo rje)
- 24 タクデーワ (sTag sde ba Seng ge rgyal mtshan)
- 25 パンロチェンポ (dPang lo tsa' ba Blo gros brtan pa)
- 26 ラマタンパ (dPal ldan bla ma dam pa bSod nams rgyal mtshan)
- 27 レンダーワ (rJe btsun Re mda' pa gZhon nu blo gros)
- 28 ツォンカパ (Chos kyi rgyal po bTsong[sic] kha pa chen po)
- 29 タルマリンチェン (Thams cad mkhyen pa Dar ma rin cen[sic])
- 30 リンチェンセンゲ (gNyal rgod Rin cen[sic] seng ge: 別名 Kun mkhyen blo gros Rin chen seng ge, b.15th c.)
- 31 ニェルトン・ペルルンパ (Se ra chos rje gNyal ston dpal lhun pa)
- 32 トウンユーベルデン (Se ra Don yod dpal ldan: 別名 gTsang rje btsun Don yod dpal ldan, 1445-1524)
- 33 ダクニャク・リクペーレルディ・ロドーベル (Dwags nyag Rig pa'i ral gri blo gros 'phel: 別名 Dwags nyag blo gros 'phel, b. 15th c.)
- 34 ツァントン・ゲレクシェニエン (gTsang ston dGe legs bshes gnyen, ---)
- 35 テウラパ・ゲンドウンサムドゥブ (Te'u ra pa dGe 'dun bsam grub, ---)
- 36 ドムダワ・ロサンチューベル (Grom mda' ba Blo bzang chos 'phel, ---)
- 37 クンチョクチューベル ('Jam mgon sMra ba'i dbang phyug dKon cog[sic] chos 'phel: 別名 Gling smad zhabs drung dKon mchog chos 'phel, 1573-1644~1646)

彼(クンチョクチューベル)が私, サホールの僧³⁴ (Za hor bande = ダライラマ5世)に恩恵を施し〔授け〕てくださった。(LG 33, 1-34, 3)

あらためて KSY と LG を比較すると, 人名の表記に若干の相違はあるが 29 タルマリンチェンまで一致する。殊に, 11 ジュニャーナパーダまでは, チョンデンリクレルの記す『弥勒法の歴史』ともほぼ一致している。ただ, ジュニャーナパーダの相承の弟子とされる 12 グナミトラは, チョンデンリクレルが「相承系譜に加えるのは誤り」と指摘した人物であり(本稿 注 21 参照), チョンデンリクレルはジュニャーナパーダに続く相承をラトナーカラシャーンティ, アバヤーカラグプタに繋げている。ただ, 逆に考えればチョンデンリクレルが敢えて「誤り」と指摘する必要があるほど, ジュニャーナパーダ - グナミトラの相承系譜は根強く支持されていたのだろう。その証左とも言えるのが LG や KSY である。

34 ダライラマ5世には, Za hor sngags smyon zil gnon bzhad pa rtsal という別名もある。密教名の一つだが, 『現観莊嚴論』の相承系譜にこの名前を用いていることは興味深い。Cf. BDRC, tA la'i bla ma 05 ngag dbang blo bzang rgya mtsho; Other Title.

この両相承系譜は、『宝徳蔵般若経』の注釈を書いてほしい」とお願いしたグナミトラに相承を繋ぎ、この人物がチベットへの流れを作った — つまり 13 リンチェンサンポへ教えを伝えたとしている。

リンチェンサンポは『大註』を改訂・翻訳したが、15 ブンタクスムバと彼の弟子である 16 ゴク・ロデンシェラプが『小註』を改訂・翻訳したことにより、チベット般若学の基盤が作られた。LG は 15 をロツポン・テンキョン (Slob dpon bsTan skyong / 'Bum phrag gsum pa'ang zer) と記し、混同することなく彼の別名を加えている。

ゴクから LG で言うところの「ゴク流」の流れに入り、17 デーシェラプに教えは受け継がれ、以後、カーラチャクラ・タントラを得意とするチョナン派の高僧達が相承に連なり、この法流から出た 26 ラマタンパを 27 レンダーワの般若学の師としている。

レンダーワから 28 ツォンカバ、29 タルマリリンチェンと続く相承系譜は、30 に至り LG と KSY では相違を見せる。

LG はタルマリリンチェンから 30 リンチェンセンゲに受け注がれる系譜を伝える。リンチェンセンゲはクンキェン・ロドーリンチェンとして知られ、セラ僧院のセラチェ初代学長 (Ser byes mkhan rabs 1) であるが、ニンマ派の教えに造詣が深かった³⁵。31 ニェルトン・ペルルンパだが、前後の人名から推測すると、セラ僧院の第 8 代僧院長 (Se ra khri rabs 8) にしてセラチェ第 2 代学長長のニェルトン・ページョルルンドゥブ (gNyal ston dpal 'byor lhun grub, 1427-1514) のことではないだろうか。32 トウンユーペルデンはセラ僧院の第 10 代僧院長にしてセラチェ第 4 代学長である。33 ~ 36 に関しては未詳だが、37 クンチョクチューペルは第 35 代ガンデン座主 (dGa' ldan khri pa 35) で、この師からダライラマ五世に教え継がれている。

一方、KSY はタルマリリンチェンから 30 ゲレクペルサンポ (ケートゥブジェ) に伝わる法流を説く。ケートゥブジェは密教にも精通し、殊にカーラチャクラ・タントラに関する膨大な著作を残しており、タルマリリンチェンの後を継ぎゲルク派の総本山とも言えるガンデン僧院の座主に就任している。

つまり、LG はタルマリリンチェンから、ニンマ派の教えも重視するセラチェの系統に受け継がれた般若学をダライラマ 5 世が学んだことを記し、KSY はケートゥブジェを初代に戴く歴代パンチェンラマ達や、彼らのタシルンポの高弟達を経てダライラマ 5 世に受け継がれた系譜を伝えていることになる。

KSY が告げるケートゥブジェからダライラマ 5 世に至る相承系譜は LG では確認でき

35 ロドーリンチェンの実家はニンマ派で、父からニンマ派の教義を教わっていた (Cf. HS, 50, 2-3)。権田ガワンウースン先生より筆者が聞いた口頭伝承では、ロドーリンチェンはゲルク派だが、ニンマの教えを中心に修行したのでセラ僧院から追い出され、セラチェ (この場合の綴りは Se ra bye 「セラ僧院から分かれた」の意味) を作ったという。問答するときも、ニンマ派のブルバ (phur pa) を懐にしまっていたと伝えられる。

ないし、ダライラマ5世から43 ツェーイゲゲンに教えが受け継がれたというのも年代的には一致しないが、KSYはダライラマ5世がタシルンポ僧院長であったロサンチュエーキギェルツェンを師と仰ぎパンチェンラマの称号を贈ったほどタシルンポ僧院と深い縁を持つものとして般若学の系譜を繋ぎ、かつボンにもニンマ派にも造詣が深かったダライラマ5世同様、ゲルク派で超宗派の志を持つ密教行者 (sNgags ram [pa]) の43 ツェーイゲゲンにこの法流は受け継がれたと考えていることが推測できる。

それが、44 ウォントウルをへてコントウルに授けられ、つまりはコントウルの学友であるパトゥルにも伝えられたのである。

3. ミニャクのダ・ゲシェー

パトゥルに般若学を伝えたと考えられるもう一人の人物、ミニャクのダ・ゲシェーについても考察する。

デブン僧院には現在4つの学堂があるが、そのうちのローセルリン (Blo gsal gling) には、「パトゥル・リンポチェに『現観莊嚴論』を教えたのはミニャクのダ・ゲシェー」という伝承がある³⁶。

ダ・ゲシェーの作品はBDRCにも薬師仏の儀軌³⁷に関する1作品しか見出せず、人物を知ることのできる資料も乏しいが、その弟子であるロサンチュエーペル (Blo bzang chos 'phel : 別名 dNgul chu dbyangs can grub pa'i rdo rje, 1809-1887) はゴマン学堂やセラ学堂の多くの高僧達を育てた学匠であり³⁸、彼の編集したチベット文法書は現在も根本テキストとして学堂で用いられている³⁹。彼の弟子 (ダ・ゲシェーの孫弟子) のロデンチュエーペル (rJe btsun bla ma dam pa Blo ldan chos 'phel bzang po, ---) の伝記⁴⁰の中に、師の師であるダ・ゲシェーの名前が現れる。以下に、(曾孫弟子が書いた) 孫弟子の伝記中の師父子の記述を和訳する。尚、[] に言葉を補い、() ではわかりやすく言い替えた。

「[ロデンチュエーペルは] 17歳の時に、主に顕密 [を勉強する] 僧は [学問に適した] 中心的な僧院 (本山) に行くのですが、自分で荷物を背負って僧院にいらっしゃり、吉祥なるデブン僧院の四つの学堂の中で、多くの知者、つまり一千万の知者が出る源である

36 権田ガワンウースン先生より筆者が聞いた口頭伝承である。「ダ・ゲシェー (ダワ・ゲシェー) はもともとセラ寺の人であり、パトゥル・リンポチェに般若学を教えた人物と伝えられている」ということであった。

37 *sMan bla'i mdo chog gi snying po bsdu pa 'dod 'jo'i bang mdzod sogs*. Cf. BDRC <https://library.bdrc.io/show/bdr:WA1KG23043>

38 Cf. BDRC, dngul chu dbyangs can grub pa'i rdo rje; Students.

39 権田ガワンウースン先生より筆者が聞いた話である。

40 ダ・ゲシェーの曾孫弟子に当たるダツカル・ロサンペルデンテンジンニエンダク (Brag dkar Blo bzang dpal ldan bstan 'dzin snyan grags, 1866-1928) の全集に、ダツカルが書いた、師のロデンチュエーペルの伝記 (BNT) が収録されている。

ローセルリン学堂〔の講義〕に参加されました。先生は偉大なる善友であるロサンチューペルという〔方でしたが、〕一般的な五つの学問と仏教の学問である顕密のどのテキストに関しても優れた知識〔を持つ〕善友のダトゥー・ゲシェー・ツルティムナムギェルという高名な方の直弟子〔で、このロサンチューペル先生〕に師事しました。その二人（ツルティムナムギェルとロサンチューペル）の善友父子の伝記は、〔まず最初に〕ミニャク・カムツェンのゲシェー・ツルティムナムギェルはお小さい時から本山にお越しになりました。顕教の学問を完成してラサの大祈願（smon lam）の時、問答形式の〔ゲシェーの資格〕試験を行い、“セラ・デプン・ガンデン〔のゲルク派三大寺が誇る〕大善友”という名称を賜りました。それから密教学堂に入り密教の勉強も完成して、顕密のテキストについても他の人に依らない確信を得て、大本山のあらゆる〔僧侶達で〕善友ツルティムナムギェルの〔講義に〕出席しないもの（zhabs la mi btugs pa）は誰もおりませんでした。〕（BNT, 16a4-16b5）

パトゥル・リンポチェとの関わりまでは跡を辿れないが、ツルティムナムギェルが顕密を修めたゲルク派の大学者だったことが、ここから窺える。

従って、ミニャクの僧院でツルティムナムギェルに会ったパトゥルが、「般若（phar phyin）について多くの質問をし答えを得て、様々な観点から論じ合った」という伝記の記述は、パトゥルがシェチェン僧院で学んだ学問を、ツルティムナムギェルによってより一層確実なものとし深めたことを伝えるものと理解できる。

4. まとめ

コントゥルの『聴聞録』やダライラマ5世の『伝授の相承録』から、パトゥルが学んだ般若学の系譜がどのようなものであったかを明らかにすることができた。それは、レンダーワからツォンカパータルマリンチェンを経てダライラマ5世に受け継がれたもので、ゲルク派の本流であるが、密教、特にカーラチャクラ・タントラにも精通したゲルク派やチョナン派の師匠達によって受け継がれてきた流れであった。パトゥルの般若学は、その法流に自らを繋ぐゲルク派の師匠より相承したものだと言える。

同時に、これにより19世紀のニンマ派六大寺の一つであるシェチェン僧院の般若学の法統を知ることにもなった。

パトゥルは、シェチェン僧院でツォンカパの解釈を受け継いだ般若学の基盤を作り、さらにミニャクのダ・ゲシェーというゲルク派においても高名な学者との問答によって般若に関する学的な理解を深めたと考えられる。

本稿で、パトゥルがツォンカパの解釈を正しく受け継いでいることは明らかになった。

LGとKSYではダライラマ5世に至る道筋に幾らか相違はあるが、どちらにしても密教を重んじる人々の間で教え継がれてきたわけであり、つまり修行の中で解釈を深めてきた般若学であると言える。

本稿の結果をもとに、今後はパトゥルの著した『現観莊嚴論』「中」註釈を和訳註解することで、ツォンカパの思想の影響や、異同も含めたパトゥルの見解を読み取っていきたい。

【略号】

- BNT Blo ldan chos 'phel dpal bzang po'i rnam thar dad pa'i gsos 'debs in *gSung 'bum / Blo bzang dpal ldan bstan 'dzin snyan grags*. dMangs khrod dpe dkon sdud sgrig khang. vol.1.
- D sDe dge 版西藏大藏經 (番号は宇井伯寿等編 1934 『西藏大藏經総目録』 仙台による)
- HS Champa Thupten Zongtse. *History of the Sera monastery of Tibet (1418-1959)*. [New Delhi] : International Academy of Indian Culture and Aditya Prakashan, 1995.
- KSY gNas gsar bkra shis chos 'phel. 'Jam mgon kong sprul yon tan rgya mtsho'i *gSan yig dGos 'dod kun 'byung*, Mi rigs dpe skrun khang, 2009.
- LG Ngai dbang blo bzang rgya mtsho. Sher phyin mngon rtogs rgyan rtsa 'grel dang bcas pa'i lung brgyud in *gSung 'bum / Ngag dbang blo bzang rgya mtsho*. [Pe cin] : Krung go'i bod rig pa dpe skrun khang, 2009. vol.1. pp.33-34.
- LGm Ngag dbang blo bzang rgya mtsho. Sher phyin mngon rtogs rgyan rtsa 'grel dang bcas pa'i lung brgyud in *Thams cad mkhyen pa rGyal ba lnga chen po Ngag dbang blo bzang rgya mtsho'i gSung 'bum*. [Gangtok, Sikkim] : Sikkim Research Institute of Tibetology, 1991-1995. vol.1. 49-51.
- LRB Tsong kha pa. *Byang chub lam rim che ba*. lHa sa Zhol edition. 1a1-523a4. (『菩提道次第大論』)
- LRS Tsong kha pa. *sKyes bu gsum gyi nyams su blang ba'i byang chub lam gyi rim pa bzhugs so*. ba. lHa sa Zhol edition. 1a1-201b3. (『菩提道次第小論』)
- MD *Gangs can mkhas grub rim byon ming mdzod*. Kan su'u mi rigs dpe skrun khang, 1992. (『雪域歷代名人辞典』)
- MNg Harihadrā. *Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i man ngag gi bstan bcos mngon par rtogs pa'i rgyan zhes bya ba'i 'grel pa*. (『小註』) D 3793, Sher phyin, ja 78b1-140a7.
- NT *O rgyan 'jigs med chos kyi dbang po'i rnam thar dad pa'i gsos sman bdud rtsi'i bum bcud ces bya ba bzhugs so* in PSB (vol. 1), 1-87. (『伝記』)
- NTD *O rgyan 'jigs med chos kyi dbang po'i rnam thar mdor bsdus* in PSB (vol. 1), 1-7[sic]. (『小伝』)
- PB *Sher phyin mngon rtogs rgyan gyi 'bru 'grel* in PSB (vol. 5), 1-180.
- PGR *Sher phyin rgyan gyi spyi don bsgom rim nyung ngu gzhung lugs legs bshad bzhugs so* in PSB (vol. 5), 184-226. (『修習次第』)
- PP *Sher phyin mngon rtogs rgyan gyi spyi don* in PSB (vol. 4), 1-490. (『概説』)
- PS *Sher phyin mngon rtogs rgyan gyi sa bcad* in PSB (vol. 2), 244-261.
- PSB *O rgyan 'jigs med chos kyi dbang po. dPal sprul o rgyan 'jigs med chos kyi dbang po'i gsung 'bum bzhugs so*. Si khron mi rigs dpe skrun khang, 2009 (8 vols).
- TsL Maitreya. *Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i man ngag gi bstan bcos mngon par rtogs pa'i rgyan zhes bya ba'i tshig le'ur byas pa*. D 3786, Sher phyin, ka 1b1-13a7. 『現観莊嚴論 撰頌』
- TC Ta' ra na' tha. Jo nang rje btsun Ta' ra na' tha'i gsung 'bum dpe bsdur ma bzhugs so in *Jo nang Ta' ra na' tha'i gsung 'bum* (vol. 75), dPal brtsegs bod yig dpe rnying zhib 'jug khang nas bsgrigs. Krung go'i bod rig pa dpe skrun khang, 2008.

【参考文献】

- Brunnhölzl, Karl 2012 *Groundless Paths : The Prajñāpāramitā Sūtras, The Ornament of Clear Realization, and Its Commentaries in the Tibetan Nyingma Tradition*. Ithaca : Snow Lion.
- BDRC (The Buddhist Digital Archives) <https://library.bdrclibrary.org/>
- Ricard, Matthieu 2017 *Enlightened vagabond : the life and teachings of Patrul Rinpoche*. Boulder : Shambhala.
- Sparham, Gareth 2008-2013 *Golden Garland of Eloquence: Legs bshad gser phreng* by Tsong kha pa, 4 vols, California: Jain Publishing company.
- 石川美恵 2016 「オギエン・ジクメ・チューキワンポの『現観莊嚴論 概説』について」『印度学仏教学研究』65-1. 日本印度学仏教学会. 102-108.
- 2017 「パトゥル・リンポチェの『修習次第』試訳」『東洋学研究』55. 東洋大学東洋学研究所. 195-221.
- 2019 「オギエン・ジクメ・チューキワンポの *bsGom rim nyung ngu* について」『印度学仏教学研究』67-2. 日本印度学仏教学会. 179-185.
- 2021 「パトゥル・リンポチェによる大・中・小の『現観莊嚴論』註の先後について」『東洋学研究』58. 東洋大学東洋学研究所. 209-222.
- 石浜裕美子・福田洋一 2008 『聖ツォンカバ伝』大東出版社.
- 今枝由郎 1986 「タルパリン寺院教院(中央ブータン)における“仏教学”」『研究所報』NO.14 所収, 大谷大学信州総合研究所. 7-10.
- 梶濱亮俊 1997 「ペトウル・リンポチェの生涯と浄土思想」『渡邊隆生教授還暦記念 仏教思想文化史論叢』263-282.
- 加納和雄・中村法道 2009 『チョムデンリクレル著『弥勒法の歴史』—テキストと和訳—』http://kanopapers.web.fc2.com/kano-nakamura_2009.pdf. 1-139.
- 辛嶋静志 2019 「アジタと弥勒—大衆部が初期大乘仏典を作ったことのさらなる証拠：カナガハリ大塔の帰属部派を推定する—」『印度学仏教学研究』67-2. 日本印度学仏教学会. 56-63
- 栗本洋子 2008 「康熙朝におけるチャンキャ二世ガワン＝ロサン＝チューデンの北京招請」『内陸アジア史研究』23. 内陸アジア史学会. 49-69.
- 田中公明 2014 『「般若学」入門』大法輪閣.
- 寺本婉雅 1928 『ターラナータ仏教史』丙午出版社.
- 根本裕史 2012 「チベット撰述の『現観莊嚴論』諸註釈に見られる弥勒観 —ブトンからジャムヤンシェーパまで—」『哲学・思想論集』37. 筑波大学大学院人文社会科学研究所哲学・思想専攻. 87-109.
- 兵藤一夫 2000 『般若経釈 現観莊嚴論の研究』文栄堂書店.

(令和4年度 学術研究助成基金助成金 基盤研究(C) (22K00059) による研究成果の一部)

<キーワード>

パトゥル・リンポチェ, 現観莊嚴論, ツォンカバ, コントウル・ロドウタイエー, 聴聞録